

「練り合い」とディープアクティブラーニング 高いレベルでの間主観的な合意形成の原理

水野正朗（愛知文教大学）・中村陽明（三重県立四日市南高等学校）
坂本篤史（福島大学）・和井田節子（共栄大学）

キーワード：深い学び、練り合い、納得解、間主観的な合意形成

1. はじめに

学習者全員のアクティブラーニングは一般に、「学習に対する学習者の能動的な参加」を目指し、グループワーク、ディスカッション、ICT の活用などの諸活動を取り入れ、認知プロセスを外化（アウトプット）する学習活動と見なされる。アクティブラーニングは、大学教育の質的転換の方策として、また初等中等教育における授業改善の決め手として半ば強制力を伴って推進されようとしている。しかしその一方で、授業にアクティブラーニングを取り入れるたことで、見た目は活発な学習活動になったが、どうも学びが深まらないという悩みが指摘されるようになった。したがって、いま問われるべきは、学習形態の変更そのものではなく、それによって学習の質と内容が向上したかどうかである。

特別な状況でない通常の教室場面でのアクティブラーニングによって、「注入主義」や「正解主義」、逆に「活動あって学びなし」の状況を克服して学習の質を高めることは意外に難しいと、多くの教師が感じている。その意味で、学びの質と内容の向上、「深さ」をもたらす学習原理を解明することが、喫緊の課題となってきたと言える。

本ラウンドテーブルでは、相互対話がなされ、学習活動が活性化している教室において、知識がいかにして共同的（協同的・協働的）に構成されているのかという普遍的な課題に研究関心を持ち、授業における対話（相互作用）や、問題解決に向けた探究活動の質と内容をいかに高めるかをテーマとする。高いレベルでの間主観的（相互主観的）な合意形成の過程は、かつて「練りあい」「高め合い」などと呼ばれた集団思考の現象と密接に関連する。学習者同士が積極的に意見を出し合って思考を集団的に深めるための方策を検討すると同時に、そこに内在する学習原理を探り、そのような「深い」学びの実現において、教室という場が果たす機能や、そこでの教師の役割を明らかにする必要がある。

学習者間の相互作用を深め、建設的な議論を導き、高次の「納得解」を形成していく授業は、はたして、どのような原理によって実現されているのだろうか。

以上の課題に取り組むため、文系の学習課題（たとえば国語）や理系の学習課題（たとえば物理・数学）を例にとり、フロアを含めた参加者全員が協力して議論をしながら問題解決に当たる。その上で、実際に行われた集団的な議論の過程を参加者全員で振り返り、相互分析する。

アクティブラーニングを超えた「深い学び」を実現するための学習原理、高いレベルでの間主観的な合意形成の原理を、90 分という短い時間であるが、参加者全員の議論によって探究していきたい。

2. 具体的な進め方

報告者の発表や指定討論を聞いてから、フロア全体との質疑応答に移るというような通常のラウンドテーブルの持ち方ではなく、会場に集まったフロア全員が小グループになって課題解決に参加して、相互に議論するというワークショップの形式をとる。

- ①発表者がある授業場面を設定し、参加者に何らかの課題（集団の共通問題）を出す。
- ②参加者は、その課題について意見を出しあい、討論する。
- ③発表者（教師役）は「納得解」を求め、フロア全体の討論をファシリテートする。
- ④合意形成に向けた集団思考のプロセスに働くメカニズム（原理）について検討する。
- ⑤得られた議論の成果について振り返る（リフレクション）。

3. 議論の手がかりとする観点

本ラウンドテーブルでは、個人と集団の思考の相互関連的な深まりを考える議論を深めやすくするためにいくつかの観点を設定する。

- ①教室にたくさんの学習がいることをいかすこと、その意味
- ②学びのゴール（学習者に身につけさせたい知識・技能・能力）
- ③集団における共通問題の成立と発展、自分の問題との関連づけ
- ④学習課題の構造化、「柱となる問い」
- ⑤個性的な考えの出現とその扱い方
- ⑥幅やあつみのある思考（重松鷹康 1970 『考える子ども』72 号 5-7 頁）
 - （1）子どもが抱えた矛盾にかかわって、矛盾を解決しようとするもの。
 - （2）他の分野の知識との結びつきを拡大し構造化する多面的な関連性を持つもの。
 - （3）子ども自身にはっきり捉えられているもの
- ⑦間主観的（相互主観的）な合意形成、納得解
- ⑧学習課題の成立と「間主観性」（共通認識）の成立過程との相互関係
- ⑨学びのルール
- ⑩授業研究会のあり方

「深い学び」は、日本の授業研究において古くから追求されてきた。その意味で、ディープアクティブラーニングは、古くて新しい課題である。授業の事実をもとに授業の本質を研究する授業分析は、ここでも重要な役割を果たすことになるだろう。